

唯物論者の祈り： 『ヘンリー・アダムズの教育』について

吉国浩哉

たとえば、ハンナ・アレントは『人間の条件』において、まさしく言葉によって「私たちは自分自身を人間世界の中に挿入する」のであり、その意味でこの挿入は「第二の誕生に似ている」と述べている(288)。そして反対に、このような言葉がない状態は「私的 private 領域」と呼ばれ、そこにおいては「真に人間的な生活に不可欠なものが『奪われている』deprived」とされた(87)。アレントにとって、言葉の不在、すなわち沈黙とは忌むべきもの、そしてそのような沈黙が不在であるということは何か望ましいこと、「誕生」に比肩するほどに「人間の条件」に適う状況のように思われているのである。このような沈黙の拒絶を共有する思想家は多いし、¹たとえ違和を感じはしても異議を唱えようとまで思う者はそう多くはないだろう。沈黙の不在が「人間」の役に立っている場合がたしかに多いからだ。常に私の言葉を聴いてくれる他者がいるという「人間世界」は、私にそれなりの安心をもたらししてくれるだろうし、そんな他者が世界における私の存在を担保してもくれるだろう。さらにいえば、このような沈黙の不在は、言葉によって構成される文学から生活の糧を得ている人間たちにとっても都合がいいことなのかもしれない。²

しかし、本当にそれでいいのだろうか。状況によっては、むしろ沈黙の方が貴重なものであり、恩寵とさえなることもあるのではないだろうか。つまり、私が何かを言っても言わなくても、「人間世界」の内部で政治的に仕切られた時と場所の境界に従って、上空から見下ろす視線により敵と味方に機械的に振り分けられてしまうような今となってはもはやお馴染みの状況である。アレントの意に反して、この状況を生きる人々にとっては、たとえ極大的に困難であっても待望されているのはまさに沈黙なのではないか。なぜならば、何も言わないということも、文字通り言葉が不在なのではなく、つまり無意味なのではなく、パフォーマンスに「黙認」を意味して（いると見なされて）しまおうし、それに対抗する否定もまた同様だからだ。全ての「人間」が例外なく常に何かのサインを何らかの形で発し続けて（いると見なされて）おり、原理的に沈黙は認められてはいないのである。もちろん、ここには何か大事なものが失われている。何か失われているという感覚を抱かざるを得ないような力が働いている。しかし、この感覚を抱くこと自体が実は私の発するサインになっているのかもしれない。そんな風に考えることから始めてみる。

ヘンリー・アダムズはアメリカの作家である。彼の生きていた時間は19世紀と20

世紀にまたがっている。今はもう生きてはいない。その自伝『ヘンリー・アダムズの教育』を沈黙の文学として読み進めたいと思う。そして、アダムズの沈黙の文学がそのリミットにおいて破綻するのを見届けた上で、そこに祈りの文学を垣間見る。しかし、このことは沈黙の文学から祈りの文学への発展やアダムズ自身の知恵の獲得を意味するのではない。そのように一方が他方に対して先行するのではなく、両者が複雑に絡み合いながらも互いを支え合っている様を捉えてみたいのである。³

『ヘンリー・アダムズの教育』には、まさに「人間世界」に敵と味方しかいなくなった第一次「世界」大戦中の1918年をその日付としてもつ、ヘンリー・カボット・ロッジ名義の「編者による序文」が付されている。そこには次のような一文がある。⁴

In the end, he [Adams] preferred to leave the “Education” unpublished, avowedly incomplete, trusting that it might quietly fade from memory. According to his theory of history as explained in Chapters XXXIII and XXXIV, the teacher was at best helpless, and, in the immediate future, silence next to good temper was the mark of sense. After midsummer, 1914, the rule was made absolute. (xxviii)

『教育』は1918年のアダムズの死後に出版され、その年のピューリツァー賞を獲得したが、もともとは私家版として1907年に百部だけ印刷され友人や知人にのみ読まれた書物である。というのも、私家版の反響の大きさからすぐに普及版の出版を求められたにもかかわらず、アダムズ自身が応じようとはしなかったからだ。つまりこの「編者による序文」が報告しているところによると、「沈黙は優しさに次ぐ良識の証である」ともあるように、アダムズとしては出版ではなく沈黙を望んでいたということである。この辺の事情はヘンリー・ジェイムズに宛てた手紙が詳しい。その中でアダムズは、自らが著した『教育』を「単なる墓場の防護盾」と呼んでいるのである。それは一つには、祖父と曾祖父がともにアメリカ合衆国大統領というアダムズの生涯は、結局大統領にはなれなかったという「失敗」も含めて、十分に世間の好奇心の的であったのだが、そのように社会のおしゃべりの対象になっていることをアダムズが嫌悪していたからである。⁵ そして「あなたの人生が伝記作家たちに奪われないよう、あなたも私と同じように自分の人生を自らのものとすることをおすすめします」というジェイムズへの警告(Letters VI 136)を考慮すれば、『教育』とは伝記の生産、すなわちアダムズ自らの生について書かれ続ける言葉を停止させ、社会における自らの沈黙の達成を、その困難を知りつつも、あるいは知っているからこそあえて目論むテキストであるといえよう。同様に、アダムズ自身も家族や友人たちの伝記を書くように求められていたのにもかかわらず、彼は自分の妻や友人を含め死者たちについて書くことも好まなかった。「伝記は全て、その人の価値を貶め」てしまうので、アダムズは「その人の友人や同輩たちが語っ

たことがなくてもある種の雰囲気が出せるのなら、喜んでそのようなものを消し去るだろう」と断じている。⁶ ここには、アダムズについて語っている社会一般にとどまらず、より根本的に書くことや書かれたものをその本質としている「人間世界」への不信がある。⁷ アダムズは自分が他者によって書かれることも、自分が（死んだ）他者について書くことも避けようとしていたのである。にもかかわらず、アダムズは『教育』を書いたのだが、これはあくまでも「ジョン・ヘイの伝記を書かせようとする圧力への対抗策」なのであって(Letters VI 52)、すなわち、アダムズ自身とヘイら彼の亡き友人たちについて為されているおしゃべりの連続をストップするための、まさに「防護盾」として書かれているのである。そして、社会が産出する言葉が停止すれば、そこには沈黙がやってくるだろう。つまり、自伝の執筆によってアダムズが目論んでいたのは、世間のおしゃべりが止んだ後の沈黙の領域に自らが到達することだったのである。

そのような『ヘンリー・アダムズの教育』は、(三人称で書かれてはいるものの)一応はアダムズによる人生の物語という自伝の形式をとっており、その生年である1838年から自伝執筆の現在であり親友であるジョン・ヘイが病死する1905年まで、途中に二十年の中断を挟みつつも時系列に従って進行する。しかし、決して一つのトーンでそのまま進行するのではなく、前半(1-20章)は少年時代の家族との関係、ドイツ留学、南北戦争、ハーヴァードでの教授職など、身の回りに起こった出来事の叙述が比較的多いが、中断後の後半(21-35章)になると実際の出来事よりも科学や歴史についての自らの思弁をそのまま展開することが多くなっている。このことについてキャロリン・ポーターは前半が「問題」で後半がその「解決」になっていると読んでいるのだが(187)、彼女が考えるほど前半／後半で「問題」／「解決」が明確に分かれるか疑問の余地があるにせよ、「問題」とその「解決」という形式がこのテキストで重要性を帯びているという指摘は鋭い。というのも、敵味方などの単純なカテゴリーへと対象を巻き込みながら際限なく続いている人間世界のおしゃべり、そしてアダムズ自身のおしゃべりをも終わらせて沈黙をもたらすために、アダムズが探求しているのは言葉の連続を停止させる決定的な「最後の言葉」(472)だからである。そしてその探求がアダムズ自身に取り憑いている「永遠の問い」に対する「答え」という形をとっているのである。この「最後の言葉」としての「答え」さえ掴み取ってしまえば、問うために言葉を重ねる必要はもはやなくなってしまふ。だから、このテキストは沈黙を目指していると同時に、また決定的な「知識」としての「答え」を求めているという意味で「教育」でもあるのだ。そして、そのような「問い」は、第六章「ローマ」では『ローマ帝国衰亡史』を著したギボンが抱いた問いという形をとる。つまり、ローマ帝国の「衰退」はいかにして「説明」しうるかという問いである(91)。

The young man [Adams] had no idea what he was doing. The thought of posing for a Gibbon never entered his mind. He was a tourist, even to the depths of his sub-consciousness, and it was well for him that he should

be nothing else, for even the greatest of men cannot sit with dignity, "in the close of evening, among the ruins of the Capitol," unless they have something quite original to say about it. Tacitus could do it; so could Michael Angelo; and so, at a pinch, could Gibbon, though in figure hardly heroic; but, in sum, none of them could say very much more than the tourist, who went on repeating to himself the eternal question: — Why! Why!! Why!!! — as his neighbor, the blind beggar, might do, sitting next him, on the church steps. No one ever had answered the question to the satisfaction of any one else; yet every one who had either head or heart, felt that sooner or later he must make up his mind what answer to accept. Substitute the word America for the word Rome, and the question became personal. (92)

つまり、「なぜだ」という問いである。世界の根拠を問い糺すような問いである。その主題はローマやアメリカの栄枯衰盛でもあるいは家族や友人の死でもいいのだが、それら出来事の全ての生起を含む世界に対して「なぜだ」と問いかけているのであり、それに対して、たとえばローマ帝国の衰退の原因をゲルマン民族の大移動と理知的に言ってみたところでそれはただのおしゃべりでしかなく、何の答えにもなっていないのである。というのも、そのような理知的な答えは、ではその大移動は「なぜ」起きたのかというような「問い」を無際限に呼び込むことになるし、そうなってくると原因追及に対する無際限な答えも単なる言葉の言い換えになってしまうからだ。そうではなく、アダムズの問いは『旧約聖書』におけるヨブの問いかけと同種のものであり、地上的な原因への参照による納得を拒否するような問いかけである。「私は全能者に語りたい、私は神に抗議したいと思うのだ」(13.3)。⁸ 理知的には納得できないがゆえに、この「なぜだ」という問いは何度も繰り返される。1893年のシカゴ万博(340)、リンカーン暗殺(209)、ロシア内務相暗殺(471)のたびに、アダムズは実際にあるいは比喩的にこのローマの教会(サンタ・マリア・ディ・アラ・コエリ)の階段に座って問い続ける。ローマは「機械的に謎の上に謎を積み重ね」ていく(90)。つまり、アダムズにとってそこから言葉が無際限に生まれてくるのが「永遠の問い」なのだ。ゆえに言葉の連続を停止させるような「答え」を見つけ出すことがアダムズの企てとなる。

そして、ヘンリー・アダムズの姉、ルイザ・キャサリン・クーンについて書かれたことは、このような沈黙をもたらす「最後の言葉」への企図のひとつである。アダムズにとって彼女は「彼の長きにわたる様々に聡明な女性たちとの体験の中で出会った、最も輝いていた一人」(35)であり、「彼が初めて親しくなった女性で、利発で感性も鋭く、頑固、あるいは意志に充ちていて、活気にあふれ、優しく、そして多くの男性を理想で充たすほど知的」(85)であったというように、その思い出を書かずにはいられないような人物なのだが、彼が32歳の時、事故による破傷風のために旅行先のイタリアで急死

してしまう。アダムズはこの姉の死について劇的な描写を試みているが、彼女の人生という物語の終わりをマークし、「なぜ」という問いに答えるような「最後の言葉」こそが沈黙を求める彼の標的である。

このルイザとヘンリーのような、死者と遺族の関係についてフロイトとクリステヴァがそれぞれ「喪とメランコリー」と『黒い太陽』の中で独自の思弁を展開している。フロイトは「愛する者を失ったための反応であるか、あるいは祖国、自由、理想などのような、愛する者の代わりになった抽象物の喪失に対する反応」を「喪」と呼び(137)、「自我を動かして対象を断念させるために、対象が死んだことを明らかにし [declare]、自分が生き残る時の利得を自我に示す」ことを「喪の仕事 (Trauerarbeit)」であるとした(148)。遺された者は、はっきりと言葉にして、その喪の仕事の対象たる死者が「死んだことを明らかにし」なければならないのだが、それが可能になるためにはまず不在の対象としての死者の意味を完全に把握している必要がある。つまり、「誰を失ったか」だけではなく、「その人について何を失ったか」を精確に分かっていなければならないのだ(139、傍点は原文)。このような死者の不在／不在の死者の最も適切な意味づけが喪の仕事の根幹である。フロイトの思弁をさらに発展させたクリステヴァは喪の仕事と書くことや書かれたものとをより直接的に結びつけて考える。彼女によれば、「うしなわれたくもの」を昇華によって支配する能力(9)である喪の仕事の成否は、生者の「意味から、意味が死および／あるいは無意味の中に失われてしまったまさにその場所へと転移する能力」(16)にかかっている。つまり、喪の仕事とは意味のある言語の中に、失われた対象を適切に表象する(=再現前させる)ことなのである。そして、この死者を指示する記号は指示される対象が根本的に不在であるために原理的にはどんな記号でも際限無く置換可能なのだが、それを停止させることによって喪の仕事を完遂するような特別な意味をもたらしてくれる記号が「超記号 hyper-signe」である。それは「もはや存在しない何ものか、だがよりすぐれた意味作用を私のために取り戻し、再びとらえてくれる何者かの、壮麗さとしてのアレゴリーである。なぜよりすぐれた意味作用かといえば、私は今ここで、永遠のために、第三者のために、揺らぐことのない調和の中で、虚無をよりよく作り直すことができるからである」(12、強調は原文)。死んだ姉について書き切ってしまうこと、それ以上語る必要が無くなるような最後の言葉を見つけることが、『教育』の目的とするところであるが、その意味で、アダムズの企図は喪の仕事でもあるといえるし、「よりすぐれた意味作用」をもつ特権的な「超記号」は死者についての言葉の連続を断ち切ってくれるだろう。アダムズは姉の死の意味について考えている。死んだ姉の意味を考えている。それから、姉を死に至らしめた何かについて、姉の生と死の両方を司っていた何かについて納得したいと思っている。もちろん、この問いは『教育』の中で最大の問い「なぜだ」というローマでの問いの一変奏であり、その答えはアダムズと死んだルイザの両方を含む世界に最終的意味を与えてくれるような究極的根拠に関わっている。

そのため、義兄からの報せを聞いて駆けつけたアダムズが危篤に陥った姉のもとに到

着した、「その時、最後のレッスン——教育の満期総決算——が始まった」のである(287)。このことがアダムズが切望する(テキストの)最後の言葉、あるいは「永遠の問い」の答えをその射程に見据えているのは明らかだ。

Death took features altogether new to him, in these rich and sensuous surroundings. Nature enjoyed it, played with it, the horror added to her charm, she liked the torture, and smothered her victim with caresses. Never had one seen her so winning. The hot Italian summer brooded outside, over the market-place and the picturesque peasants, and, in the singular color of the Tuscan atmosphere, the hills and vineyards of the Apennines seemed bursting with mid-summer blood. The sick-room itself glowed with the Italian joy of life; friends filled it; no harsh northern lights pierced the soft shadows; even the dying woman shared the sense of the Italian summer, the soft, velvet air, the humor, the courage, the sensual fulness of Nature and man. She faced death, as women mostly do, bravely and even gaily, racked slowly to unconsciousness, but yielding only to violence, as a soldier sabred in battle. For many thousands of years, on these hills and plains, Nature had gone on sabring men and women with the same air of sensual pleasure. (288)

ルイザの最期は理不尽な苦しみに満ちている。アダムズの「最後のレッスン」とはこの苦痛をもたらす「自然」の発見である。より正確に言えば、「自然」という「超記号」との逢着である。「習慣の殻を破ることなしに」生きてきたアダムズは、この時までには「自然を見たことがなかった。その表面だけ、若者に見せる糖衣しか見たことがなかった」のである(287)。そして、「自然」はルイザの死について最も適切な説明となる。死者としてのルイザの意味は「自然」の中に、あるいは「自然」に位置づけられる。彼女の死は「自然」なのだ。ルイザは「自然」によって殺された、または「自然」に死んだと、アダムズは自らを納得させ、そしてその死を「宣言」することができるのである。「自然」は死者の意味を自らに対して固定し、それ以上のルイザについての言葉を断ち切る最後の言葉だ。カーモードも指摘しているように、「中」としての人の一生の意味を決定するのは「始めと終わりとの調和」なのである(18)。そしてさらに言えば、この死んだ姉の意味の基盤となった「自然」は、アダムズ自身の意味をも決定し、それを求めて続いていたおしゃべりを停止させる。というのも、「自然」が「幾千年も男たち女たちを切り刻み続けてきた」というような描かれ方をされている時、そのような普遍的概念としての「自然」の中に含まれているのは、死者としての姉だけでなく、生者であるアダムズ自身でもあるのだ。この「自然」の意味作用はキリスト教の神のように世界全体とその中に生きる人間たちに最終的で決定的な意味を与える。実際、アダムズはこ

の「自然」の「悪魔のような残酷な力」を眼前にして、人格的な神は信じられなくなるが、その代わりさらに形而上学的な「実体 Substance」を認めている(289)。「自然」の中にアダムズは自らの位置を発見するのだ。まさにこの「自然」の発見はアダムズ自身の世界に占める場所を確定したのである。「どんな知的教育も、それが完成した時には終わるべきである」とアダムズは述べていたが、それというのも「その時には、躊躇うことも少なくなり、より確実な世界を取り扱えるようになる」からである(156)。その意味でもこの「自然」の発見は「最後のレッスン」であり、アダムズの喪の仕事はここに完了する。

ところが、この「最後のレッスン」にもかわらず、『ヘンリー・アダムズの教育』は書かれ続けてしまう。結果から振り返ると、ここはまだ中間点を通り過ぎたばかりのところである。そして、「最後のレッスン」だったはずの「自然」も再び反復されてしまうのだ。姉の死を看取った直後にアダムズは精神を落ち着けるためにアルプスに向かうのだが、「自然」そのものの姿である「無秩序で無目的な力による混沌」をモンブランに見いだしてしまいなかなか落ち着かない。そこで、これに対しては「自然の幻影」を回復しようとするのだが、今度はプロシアとフランスの「戦争による混沌」という「偶然の一致」と遭遇してしまう。この「偶然の一致」が未だ記憶に新しい「自然」の発見と姉の死としての「彼個人の恐怖という歪んだ悪夢を模倣し再現」するのである(289)。さらにいえば、この「個人的な恐怖」について当時のアダムズは「まだ知らなかったし、知るのに20年かかった」のだが、これは身近な女性の死という意味で、姉の死の反復としてアダムズの妻マリアンの自殺にも言及しているのである。加えて、決定されたはずのルイザのイメージも亡霊のように何度も反復される。たとえば、生前のルイザに関して、政治的問題に関して判断不能に陥った時など(83-85)アダムズは精神の窮地が何度も彼女によって救われたことを述べているが、このような女性による救済はその36年後、再びアダムズがアメリカの近代化に動揺した時にも繰り返される。今度はカボット・ロッジ夫人が彼をヨーロッパへと連れ出してくれたことを、アダムズは「以前にはよくあったように、女性によって救われた」(353)と考えているのである。同様に、30章で述べられる女性についての考察も、ルイザから引き出された女性に関する知識(85)の再演になっている。ルイザのイメージが何度も降霊しているのだ。たとえ「自然」という「超記号」をもってしても喪の仕事完了することはできていない。対象は未だ「断念」されていない。亡霊祓いは済んでいない。アダムズは死者についてのおしゃべりを止めることはできていないのである。まだ問いは問われ続けているし、答えを求めての「教育」も続いている。「最後のレッスン」は最後たりえなかったのだ。

この辺の終わりの失敗の事情を少し詳しく考えてみる。言葉の連続を停止することを期待された「自然」という「超記号」なのだが、ルイザの最期の場面では「イタリアの夏の感覚、柔らかいヴェルヴェットのような空気、ユーモア、勇氣、自然と人との感覚的充足」というようにその「感覚」という属性が強調されている。「自然」の発見は「感覚」の機能によってもたらされたということである。

One [Adams] had heard and read a great deal about death, and even seen a little of it, and knew by heart the thousand commonplaces of religion and poetry which seemed to deaden one's senses and veil the horror. Society being immortal, could put on immortality at will. Adams being mortal, felt only the mortality. (287-88)

アダムズにとって、ルイザの死という「自然」の出来事は「全く新しい様相を呈して」(288)おり、それを把握することができたのは「感覚」によるものなのである。他方それまでは、死とは無数の人々によって際限なく使われてきた「幾千もの決まり文句」によって構築されたものだった。「自然」の発見としてのルイザとの死別を境に、アダムズにとって死は使い古された決まり文句ではなく「恐怖」のような感覚を通じて理解されるものになった。今や、決まり文句よりも感覚の方がより本質的だと見なされているのである。というのも、これらの感覚こそが人の生も死もその内部に包含している「自然」と結びついているからだ。ここでは感覚と決まり文句が鋭く対立している。

別の箇所での「決まり文句」のサンプルを、アダムズは当時のアメリカ合衆国大統領グラントの演説、すなわち「平和をわれらに！」や「悪法に対処する最良の方法はそれを施行することである」などのキャッチフレーズの中に見出している。そして、アダムズによれば、これらの決まり文句の特徴はその意味が「可逆的」(265)であることにある。これらグラントのキャッチフレーズのような言葉はコンテキストによってその意味が変化してしまうのである。すなわち、決まり文句はさまざまなコンテキストで引用することが可能であり、その意味や価値を決定するのはそれぞれの引用先のコンテキストなのである。実際、グラントの「ヴェニスも水がなければきれいな街になるでしょうに」という言い回しは、「マーク・トウェインであれば、彼一流のウィットとして数えられることになるが、グラントの場合はありふれた無知を示すものとなる」のである(265-66)。

ところで、このような意味の偏向を常に伴う引用の力学をデリダは言葉を言葉たらしめているものとして捉えている。すなわち、言葉である限り、どんな時にどんな人間によってどんな場所でも、つまりどんなコンテキストでも使用可能であり、一度も引用できないような反復できないような、つまり一度限りしか使われないような、一人にしか使われないような言葉は言葉としての機能を果たさないのである。そもそも、「人間」はそのような言葉を想像することさえもできないだろう。そしてデリダの議論のポイントは、言葉は可能性としてはどんなコンテキストでも引用され反復することが可能なのだが、その際に、言葉の送信者と受信者の意図どころか、彼らの死さえも構いなしに、読解されること、つまり意味作用を行うことが可能であるということだ。言葉を構造づけているのは、この「孤児」のような「本質的漂流状態」なのである(「署名」21)。⁹ アダムズの言い方を引用すれば「自分が言うこと全てを意図している者は誰もいないし、

自分が意図すること全てを言う者もほとんどいない。というのも、言葉は滑りやすく、思考には粘り気があるからである」(451)。ゆえに、決まり文句とは、アダムズが指摘するように引用によって意味が「可逆的」に変化し、(その定義からして) 気の遠くなるほど反復されるものだとするならば、言語であることの条件とはまさしく決まり文句であることになる。

だとすれば、その決まり文句の対立項であるアダムズの「感覚」とは、必然的に言語と対立するもの、非または反言語的なものとなる。決まり文句が反復可能性をその目印としているのに対し、アダムズの言う感覚がその「新しさ」や初めて経験するものであることを強調しているのも、感覚の非言語的性質を示すことになっている。そして、このような感覚によってのみ把握されうる「自然」もまた非あるいは反言語的なものとなる。この時「超記号」とは他の全て記号を超えているという意味になるのだ。つまり「自然」は言語の外にある記号ではないものである。言葉を超越するものとしての「自然」はその(期待されている)超越性ゆえに、全ての言葉、そして言葉で構成されている世界の全ての意味を支える定点として機能することが可能だ。「滑りやすい」言葉で充たされた世界の意味を安定させるための言葉の連続が辿り着く最後で唯一の「実体」なのである。それは言葉の連続が最後に到達する指示対象としての言葉ではないくものなのである。これはつまり、言葉の連続を停止するために、この最後の言葉としての「自然」に非言語の資格が与えられているのである。

しかし、当然のことながら、非言語的な「超記号」としての「自然」には強力な自己否定の力が潜んでいる。アダムズによる「自然」の記述はそのような自己破壊に満ちている。アダムズにとって「自然」とは決まり文句でできた「糖衣」や「習慣の殻」の内奥に、つまり「社会」における日常生活の彼岸に隠れていて誰かに暴かれるのを待っているはずであった。しかし、この淡い期待は裏切られるのである。以下は前に引いた「感覚」的なルイザの臨終の場面の続きである。

Impressions like these are not reasoned or catalogued in the mind; they are felt as part of violent emotion; and the mind that feels them is a different one from that which reasons; it is thought of a different power and a different person. The first serious consciousness of Nature's gesture — her attitude towards life — took form then as a phantasm, a nightmare, an insanity of force. For the first time, the stage-scenery of the senses collapsed; the human mind felt itself stripped naked, vibrating in a void of shapeless energies, with resistless mass, colliding, crushing, wasting, and destroying what these same energies had created and labored from eternity to perfect. Society became fantastic, a vision of pantomime with a mechanical motion; and its so-called thought merged in the mere sense of life, and pleasure in the sense. The usual anodynes

of social medicine became evident artifice. (288)

「社会」は何かの模倣（「パントマイム」）のさらにその「ヴィジョン」になっている。この実体を持たない反復の反復によって成り立っている「社会」は、まさしく反復可能性をその本質とする決まり文句に充たされた領域なのである。これに対して、「自然」は人間が「論理的に考えたりカタログ化したりする」能力を超えた「エネルギー」に充ちている。このように一見すると、感覚的な「自然」の本質的な激しさと言葉でできた「社会」の非本質性が対置されているようである。しかし、実のところこのような対置の仕方自体が「カタログ化」そのものである。そのため、両者の最も端的な説明としては「社会」が「幻想的」なと同様に、その対立項であるはずの「自然」も「幻想」であると書かれてしまうことになる。まさしく、両者ともに「幻想」としてアダムズの「カタログ」には登録されているのである。そしてもちろん、この「カタログ」は決まり文句のみで成り立っている。結局のところ、「糖衣」の中にアダムズが見たのは、やはりまた「糖衣」だったのである。通説では、このルイザの臨終場面は理解不可能なものとしてアダムズとの遭遇であり、アダムズはその不可解なものを理性で捉えようと苦闘したということになっている（Porter 167; Bové 97）。しかし、実際にアダムズが遭遇したのはそのような理性を超えたものではなく、その不在である。喪の仕事を完了するはずだった最後の言葉たらんとした「自然」は常にすでにその超越性を剥奪されていて、それは「超記号」ではなく他と同じ普通の記号だったのだ。「自然」という記号の「抵抗不可能」な力は「その同じエネルギーが永遠から完全へと苦勞して作り出したものを衝突させ、ぶつけ、磨り減らし、破壊する」のである（この自らに向けられた権威剥奪こそがアダムズの言う「力force」の効果なのだが、それについては後で触れる）。「社会」と同じく「自然」も実体を指示するのではなく、「幻想」のような別の記号を指示しているにすぎない。要するに、ここで起こっている事態は、よく言われるような言葉が不足しているために対象を捉え切れないということではなく、逆に対象などお構いなしに言葉が過剰に連続してしまうのにそれを止めることができないということだ。アダムズはこの「自然」の前後にも「ジョージ・ワシントン」や「ガリバルディ」、あるいは「ダーウィニズム」や「気体分子運動理論」など「最後の言葉」を装う記号に何度も出会うが、その度毎に自らの思考においてその超越性を疑わずにはいられなくなるのである。「自然」の代わりにどんな記号を「永遠の問い」に対する「答え」として代入しても、そこには原理的にどんな記号でも入りうるし、さらに、どんな記号でも入りうるという状況そのものが、アダムズをして「問い」を続けさせ、答え続けさせる。このようにアダムズの「教育」は続く。

以上のように、アダムズが姉の死に際して直面したのは、おしゃべりが続いている「社会」の彼岸としての「自然」ではなく、このような区別自体が無効になってしまうような状況である。そこでは、全てが引用可能な決まり文句としての記号であり、非言語的な自然そのもののような超越的な外部はないのである。にもかかわらず、アダムズ

はまさしく「沈黙」と題された第23章で、功利主義に走る「世界」から離れて、どこにあるとも知れない「満足感に充たされた無益な沈黙の住処」へと「巡礼」に向かうと宣言する(359)。具体的にこの試みが何であるかは示されないが、その後アダムズは「トイフェルスドレック」というカーライルの『衣装哲学』の主人公名をその題に持つ第27章において、ヨーロッパ最北の街ハンメルフェストに行く。ここはカーライルの主人公が訪れた街である。そしてトイフェルスドレックはその北極を望む岬に立って「果てしなき潮路」を見つめ、そこに「死んだような沈黙」を見たのである。しかし、そう思ったのも束の間、すぐに背後から「ロシアの密輸商人」に話しかけられてしまい沈黙はあっさりと破られてしまう(248-49)。その70年後、アダムズもこの最果ての地に立つが、状況はトイフェルスドレックの頃からは大きく異なっている。かつての「死んだような沈黙」の場所は、いまや「おしゃべり」になってしまっているのである。というのも、アダムズがこの地を旅行した1901年には、電報のネットワークはすでにこの最北の地まで達しており、ちょうどアダムズの旅行中に発生したアメリカ大統領マッキンリー暗殺事件の詳細を、刻一刻と海を隔てた彼の元にまで届けていたからだ(413)。つまり、文明の進展に伴って「世界」の方もその領土を拡大しており、アダムズが探していた「沈黙の住処」もますますその領分を失っていったのである。今や言葉が世界を覆い尽くしている。結局アダムズは、世界の中に留まり続けながら、記号で記号を参照し続け、おしゃべりでおしゃべりを喚起し続けているしかない。ゆえに、常にすでに最後の言葉への途上にあるこのテキストのことをアダムズは「未完成」と呼ぶのである(xxviii)。¹⁰

この「未完成」は冒頭で引用した「編者による序文」中の言葉である。それはヘンリー・カボット・ロッジ名義になっているが、実はアダムズ本人が書いたものなのである(日付はアダムズの死後の1918年9月になっているが、実際は生前の1916年に書かれている)。そして、このような事情を知った上でこの「編者による序文」を最後まで読むと、それは困難な文章として映ってくる。つまり、『教育』を出版せずに人々の忘却を待つと断言した直後に、文章の最後はこう締め括られている：「ここにマサチューセッツ歴史協会は、修正を作者本人が行った最小限にとどめ、1907年版のままに『教育』を出版する。これは、作者の意図に反することではなく、両書ともに読む必要のある学生が入手できるようにするためである」(xxviii)。この「編者による序文」を書いたのがアダムズと知っていて読む者には、この沈黙と出版とのつながりが全く理解できない。同じ一人の人間が、一方では出版を禁じて沈黙を決意し、他方では声高に出版を宣言しているのだ。しかし、この接続の苦しさにこそ、アダムズのさらなる困難がある。つまり、沈黙を意図しても結局はその反対に終わってしまうという冒頭で触れた「人間世界」のアポリアである。そこにおいては何も意味しないものはないのだ。一見すると意味がないようにみえる「沈黙」でも、「声も出ない」という決まり文句からも分かるように、「怒り」や「哀しみ」あるいは「黙認」などコンテキストによっていくらかでも読解可能であるし、むしろ指示対象の不在があからさまであるがゆえに、さまざまな読解を誘発

しないではいられない。さらに加えれば、今までの考察は実際のところ、沈黙することができないアダムズという言葉の主体を暗黙の裡に前提としていたために、そのような主体に死が訪れば「最後の言葉」によらずとも無際限な言葉の連続が否が応でも停止せざるを得ないという見通しを持つことが可能だった。要するに、死者の沈黙、あるいは沈黙の死者に賭けることがまだできたのである。死人に口なしというわけだ。しかし、死者に口寄せして語らせる者、死者の代弁者が（この文章も含めて）珍しくもないのもまた事実である。というのも、デリダも指摘していたように、言葉はその成立条件からして、発信者の生も死もお構いなしに「孤児」のようにあらゆるコンテクストに散種され意味を発生させることが可能だからである。ゆえに、書かれたことは当然のことながら、アダムズ本人が決して書かなかったということ自体も、彼の死後雄弁に語り続ける。沈黙にも「意味のマーク」が常にすでに刻印されているのである。

実際、アダムズの沈黙を破ることに専心したジャーナリストは彼の存命中にも数多くいたし、現在でも彼の沈黙に意味を与えるアダムズ研究家は少なくない。いちいちその全てに言及することはしないが、例えば、現代の研究家ジョン・カーロス・ロウはさまざまな資料や書簡を参照しながら、『教育』でのアダムズの米西戦争とフィリピン・アメリカ戦争についての「沈黙」は彼の親友であった国務長官ジョン・ヘイの帝国主義政策への「暗黙の支持」を「大いに語っている」と主張している(2000, 180)。その他、アダムズが省略した20年の「空白」を彼の妻マリアン（の自殺）に関連させて説明する試みも多くある。¹¹ このように『教育』は過剰に雄弁なものとして見なされており、それが読まれうるような「人間世界」においては沈黙することは許されてはいない。アダムズが何を語っても語らなくても、執筆の意図は沈黙に有ろうが無かろうが、彼のテクストは如何様にも読解可能であるし、自らがテクストであることをそれに負ってさえもいる。

このような強力な読解可能性によって自らの意図どころか生存さえもどうでもよくなるような状況下で、際限なくおしゃべりを続ける自分自身のことをアダムズは「マネキン」と呼んでいる。くわえて「教育」とはその「マネキン」が身に着ける「衣装」のことであり、それを作るのは「仕立屋」なのだが、その価値は「世界」の「顧客」の要求にどれだけ「適合」しているかによって決まる(xxxx)。¹² つまり、この『教育』というテクストにおいて重要なのは人物やその性格などではなく、「マネキン」としてどんな「衣装」を身に着けているかということである。「マネキン」にとっては「衣装」が全てなのだ。そして、この奇想ももともとは『衣装哲学』からの引用なのだが、カーライルのいう「衣装」が「象徴」と関連しているように、アダムズの全てである「衣装」もそれが人間世界の参加条件である決まり文句としての言葉であることはこれまでの考察から十分に推察できる。いわば「衣装」がその全てだから「マネキン」なのだ。そこに裸としての沈黙の余地はない。

そして、「マネキン」が「衣装」を身に着け（させられ）るものとしての「教育」を司るのが「力force」である。アダムズによれば「力」とは「何であれ作用するもの、

または作用を助けるもの」と定義され、「人間は力であり、太陽もまた力であり、数学の点もまた広がりも存在もなくとも力である」(474)というように、ペンをもって書くことからアダムズ自身の存在までも含めて世界のほとんど全てはこの「力」の位相のもとにある。これが「自然」などの（常に失敗する）「超記号」と異なるのはそれが言葉を停止させる（ことを目指す）のではなく、むしろ反対に言葉を無際限に産出するもの、さらにいえばそのような言葉の無際限の産出という事態そのものを言い当てていることである。つまり、アダムズの言う「力」とは世界の彼岸にあると想像されるような超越的なものではなく、そのような超越性を、言葉であふれた世界に回収することによって、常に無効にし続けるような一元論的な「力」なのだ。¹³

The sum of force attracts: the feeble atom or molecule called man is attracted; he suffers education or growth; he is the sum of the forces that attract him; his body and his thought are alike their product; the movement of the forces controls the progress of his mind, since he can know nothing but the motions which impinge on his senses, whose sum makes education. (474)

「力」がある限りアダムズは「衣装」を取っ替え引っ替え着続ける。「力」はアダムズに引用させ続ける。すなわち、アダムズは決して「最後の言葉」には至らない書き方（＝引用）で書き続け、沈黙することができないのである。このような「力」は決してその効力を停止したり、弱めたりすることはない。「教師は永遠に影響する。彼は自らの影響がどこまで行くのか分からない」(300)というように、「力」は「無尽蔵」で(494)、永久に影響し続ける。「力」の影響から逃れることはできない。要するに、このような「力」が世界の全てであり、その外部はないのだ。

The secret of education still hid itself somewhere behind ignorance, and one fumbled over it as feebly as ever. In such labyrinths, the staff is a force almost more necessary than the legs; the pen becomes a sort of blind-man's dog, to keep him from falling into the gutters. The pen works for itself, and acts like a hand, modelling the plastic material over and over again to the form that suits it best. The form is never arbitrary, but is a sort of growth like crystallization, as any artist knows too well; for often the pencil or pen runs into side-paths and shapelessness, loses its relations, stops or is bogged. Then it has to return on its trail, and recover, if it can, its line of force. (389)

これが『教育』のヒーローである。ヘンリー・アダムズという「マネキン」は自らを引

きつける「力」の軌跡を求めて、あるいはそれに駆られて「迷宮」を彷徨っている。¹⁴ ここにはアダムズにとっての、「力」によって書くことと生きることとの関係が見て取れる。つまり、危険な「溝」に落ち込まずに生き残るためには、おとなしく「力」に従って「ペン」で書き続けなければならないのである。「脚よりも必要な力」である「ペン」はアダムズが生きることを可能にしてくれるのだが、その同じ「力」が彼を生気の抜けた「マネキン」にしてしまう。マネキンとしてアダムズは「力」が押しつける（＝引用する）「衣装」を身につけ、決まり文句を反復し続けるしかない。その反復を止めて沈黙することは全く不可能であり、何も意味しないということではできないのだ。「力」に充ちた「人間世界」はこのような寄る辺ない「マネキン」に充ちている。

ここで「力」のイデオロギー的偏向を見いだすのはたやすい。というのも、「マネキン」が呟き続ける決まり文句は「人間世界」において数限りなく使い込まれ、そこにおける害悪や不正をも直接的間接的に支えてきたからである。そのように考えると、眼下の世界を這い回っている「マネキン」たちの、そのイデオロギーのエージェント（＝敵）としての罪を、上空から見下ろしながらロウのように糾弾するのも故無きことではない。¹⁵ 境界内に留まり続けている「マネキン」には、「力」に抵抗しておしゃべりを止めることができないのである。

ここにおいて、沈黙の文学は破綻している。

アダムズとともにここまで来た、と言いたいところだがまだどこにも来てはいない。もといた場所に留まっているだけだ。しかし、祈りの文学までは脚をあと一歩だけ動かせばよい。脚がなければ杖でもかまわない。とはいえ、ここに青い鳥がいるわけではなく、いるのは繰り返すを言い続けているマネキンだけだ。だからもう少し、マネキンに寄り添いながら考えてみる。祈りの文学の担い手はこのマネキンだからだ。

このマネキンがこの世界に存在していられるのは、「力」に依存しているからである。世界には「力」の生産物のみが存在可能なのである。ゆえに、マネキンは「力」に内在しており、それを超越するものではない。「力」に外部はないとはこのことである。しかし、ここで奇妙な事態に陥ってしまう。衣装がアダムズの全てを構造化し、「力」の圏内にその全てがあるのならば、マネキンでしかないアダムズがどうして「力」について包括的に考えたり書いたりすることができるのか、ということである。アダムズをしてテキスト『教育』自体を生産したのは「力」である。この意味で、『教育』は「力」の圏内に属しているその一部であり、全体には遠く及ばない。にもかかわらず、そこではテキストの中での「力」が定義づけによってアダムズに把握されているのだ。つまり、アダムズは「力」に内在すると同時にそれを超越している。ここには「力」によって思考を導かれ書かされているはずの者がその「力」全体について書いているという逆転現象が起きているのだが、そのことによって「ヘンリー・アダムズ」という衣装を着たマネキンだけが他と違ってどこか特別に見えてくる。さらに言えば、「力」の客体としてお仕着せを着た寄る辺ない「アダムズ」の他に、否定的な形式ではあるが別のおしゃべ

りをしないアダムズがいるのかもしれないとも思えてくる。あたかも「力」によっては割り切れない何か残余のようなものがあるようなのだ。とりあえず両者を区別して（引用可能な）「アダムズ」と（引用不可能な）〈アダムズ〉と表記して考察を進めてみる。¹⁶

これを別の方面から考えてみる。『教育』は自伝なので、生まれた瞬間から時系列に従って「アダムズ」というマネキンが書かれていく。しかし、そのままのペースでいっても（書き落としを考慮しなくても）『教育』の中で書かれた「アダムズ」が全部であるとは決して言えない。テキストはそれ自身をを書き続けている〈アダムズ〉に追いつくことはないからだ。「力」は常にすでに「アダムズ」を書かれる対象（＝マネキン）としているが、その一瞬先は書く主体としての〈アダムズ〉に先行されてしまっている。常に書かれることのない沈黙の〈アダムズ〉がいるのだ。実際、初めは若かった「アダムズ」もテキストの中でひどく年老いていき、その人生の全体が書かれてしまいそうな勢いなのだが、自伝である限りその終わりである自らの死を自分で書くことは絶対にできない。『教育』最終章では自らの死期を悟ったアザラシやインドの聖人が群れや社会から離れて孤独な死を全うすることが言及されたり(502)、ハムレットの末期の言葉「あとは沈黙」が引用されたり(504)するが、それらは絶対に書かれ得ない最終的な死の沈黙である。テキストに回収されない盲点があるのだ。〈アダムズ〉は「力」が構築した「アダムズ」というマネキンの残余であり、ハムレットの言葉を借りれば、テキストの「あと」の「沈黙」なのである。¹⁷

しかし、ここには未だいくつかの困難がある。まず、〈アダムズ〉も結局は「アダムズ」に回収されてしまうという批判は有効であるし、実際にその可能性は常に伴われてしまう。便宜的に山括弧〈〉で括ってみても、鉤括弧「」のアダムズと同じように、こうして何度も反復され引用されているし、そうでもしなければ第三者はもちろんのこと（もしいるとして）当の〈アダムズ〉自身にも把握できない。それは思考の対象となったその瞬間にすでに「アダムズ」なのだ。あるいは「語り得ない」「書き得ない」「知り得ない」という属性を加えることによって把握できると思えるかもしれないが、これらにしても例えば「沈黙すべきもの」といった倫理的な要求や情緒、または何らかの神秘性を意味する記号として機能する。この辺りの事情はアダムズ自身の言葉が最も的確に示している：「不可知なものを知らうとしてはならないのに、同時にまた誰もがそれについて考え続けていることをイギリス思想はしきりに抗議している」(451)。〈アダムズ〉が決まり文句ではないことの保証はどこにもないし、それがここに書かれてしまっているということは、やはり「力」の客体として何らかの形で反復引用可能なのだ。次に、ハムレットの言葉（これ自体引用なのだが）のように、「死」でこの〈アダムズ〉をマークした場合、それはただの無と同じ、端的に無いということになってしまう。つまり、アダムズ以外の第三者からすれば「死」は「不可知なもの」と同様に何か神秘的なものの記号となってしまいうし、生きているアダムズ本人にとっては自分自身の死を考えることは（今度は文字通り）できない。アダムズ自身にとっては、死によってマークされた引用不可能で反復しない〈アダムズ〉はどこにもいないのである。以上のように〈アダ

ムズ」と「アダムズ」を区別することは破綻し、やはりマネキンがただ残るのみである。しかし、そこに何かが特異な様態を呈しているのは確かなのであり、それこそが自らをマネキンと呼んだアダムズの思考の到達点なのである：「[マネキンは]運動、比率、人間の状態の物差しでしかない。それは実在の雰囲気を纏わねばならない。実在と受け取られねばならない。あたかも生命があるかのように扱われねばならない。そのことを誰が知っただろうか？ マネキンはおそらく生命を持っていたのだ！」(xxx)。このようなマネキンの有様について死や無を呼び込むことなく肯定的な要素からさらに考えてみる。

もう一度「編者による序文」を見る。これはアダムズの死の二年前（1916年）に書かれた『教育』の中で一番最後に書かれた文章である。ここには「1912年春の大患が彼の文学活動を永久に終わらせた」と書かれてある(xxviii)。この年にアダムズは脳血栓を患って体の一部が麻痺したのだ。これが名義通りにヘンリー・カボット・ロッジによって書かれているのならどこにも矛盾はない。しかし、これを書いたのはアダムズ自身である。つまり、麻痺によってもう書くことができずと自ら述べているにもかかわらず、現に書いてしまっているのだ。前にも引いたがここでアダムズは『教育』が未だ「未完成」であると述べている。つまり、ここはまだ「力」の圏内であり、アダムズも未だ最後の言葉に向けて決まり文句を書き続けているし、これからも書かれうると述べているのである。けれども、ここでは沈黙を不可能にする「力」が当て込んでいるものが垣間見えてはいないか。ここで示されているのは、アダムズがマネキンとして未だおしゃべりを続けているという事態、そしてそれと同時に（これが書かれていた当時は）アダムズがまだ生きて書いているという事態でもある。「力」が作用し続ける時、マネキンも「反応し続け」ている(497)。つまり、「力」はマネキンが「反応」する力を持っていることを当て込んでいる。マネキンに「反応」する力がなければ、「力」は自分自身を発揮どころか、マネキンに作用することもできない。アダムズが「力」によって書かされているとしても、アダムズの書く力、アダムズのペンを持つ力、麻痺でペンが持てないならば口述筆記するための口を動かす力は、そんな「力」そのものをお膳立てしている。このアダムズの力は文学的な技巧のような抽象的観念的なものではない。人格的なものや理知的なものとも全く関係がない。文字通り、「脚」の代わりとなる「ペン」自体の力と腕の筋肉がそれを持ち紙の上で動かす力という物質的な力である。すなわち、マネキンの力である。もちろん、このような力はマネキンたちを上空からの視線に対して語らせる「力」に対抗できるものではない。むしろ、それに従うものでさえある。しかし、そのような途方もない「力」もこの物質的に反応する力、ペンを持ったり口を動かしたりする筋肉の力によってお膳立てしてもらっているのだ。この力なしでは「力」はあり得ない。「力」があるところではどこでもどんなに微小でもこの力が確実に反応しており、飢えに苦しむ人には、飢えに反応する力があるし、人工呼吸器につながれた人にも機械に反応する力が残っている。

新約聖書「テサロニケの信徒への手紙一」5章17節には「絶えず祈りなさい」とい

う言葉があるが、東方正教会に伝わるヘシカスムは「祈り」とこの「絶えず」であることを徹底的に掘り下げている。つまり、生活全体を通じて「絶えず」為していること、すなわち呼吸することと祈りを結びつけているのだ。こうして、絶えざる呼吸は絶えざる祈りになる。¹⁸ そして、マネキンをして語らせ続ける「力」が当てにしているのはマネキンが呼吸する力である。その意味で、マネキンの（呼吸する）力とは祈りでもあるのだ。「力」に「反応し続け」るためには、「絶えず祈り」続けることが必要なのである。

[T]o Adams the dynamo became a symbol of infinity. As he grew accustomed to the great gallery of machines, he began to feel the forty-foot dynamos as a moral force, much as the early Christians felt the Cross. The planet itself seemed less impressive, in its old-fashioned, deliberate, annual or daily revolution, than this huge wheel, revolving within arm's length at some vertiginous speed, and barely murmuring — scarcely humming an audible warning to stand a hair's-breadth further for respect of power — while it would not wake the baby lying close against its frame. Before the end, one began to pray to it; inherited instinct taught the natural expression of man before silent and infinite force. Among the thousand symbols of ultimate energy the dynamo was not so human as some, but it was the most expressive. (380)

『ヘンリー・アダムズの教育』で最もよく知られている一文である（というよりも、よく知られているのはおそらくこの一文だけだろう）。通説ではアダムズはこの「ダイナモ」に神性を見たことになっているが(Samuels 1964, 378)、もちろんそうではない。アダムズにとっても「ダイナモ」はただの物である。この「ダイナモ」は「自然」と同じく失敗した「超記号」であり、そこには何の超越性も付与されていない。「ダイナモ」もコンテキストによっては「神」になるのだが、この時はたまたま「表現に富んで」いたから選ばれただけだ。「自然」でも「ダイナモ」でも「聖母」でも、一見超越的に見えても所詮は他と同じ記号にすぎず、そのために何に対して祈っても同じことなのである。そして、このようにそれと知っていて単なる一つの記号に向かって祈るのは悪い冗談でないにしても、おしゃべりを停止させる「最後の言葉」の不在、すなわち沈黙の文学の破綻を積極的に強調するシニカルな身振りになっている。このアダムズはデリダと同じ位相にある。要するに超越的シニフィアンを脱構築しているのだ。¹⁹ しかし、これだけではこの場面の凄まじさを逸している。つまり、アダムズはただの物に向かって、それが神的であるか物質的であるかもお構いなしに祈ったのである。ここに祈りの本質がある。すなわち、祈りは何も構わないのである。このことは祈りがそれ自体で自足していることを意味するのではない。じつに多様なものが祈りを支えている。にもかかわら

ず、祈りは祈り以外のことには無関心に見える。そして、この無関心さこそが「力」が当てにしているものだろう。祈りは確かに「力」に対して反応するだけのものであるが、また同時にこの祈りがなければ「力」も自らを発揮することはできないのである。目前では「力」によって記号が記号を指し続け、無際限の機械のように決して止むことがない。マネキンのアダムズは「迷宮」のなかを「力」に引き摺られながら彷徨うだけである。そんなときも、彼は絶えず祈っている。そして、彼の祈りを「力」は常に当てにしているのである。

この文章もアダムズの祈りを当て込んでここまで書かれてきた。「最後の言葉」からは未だ程遠い。ゆえに、おしゃべりを続けさせる「力」によって誰かの敵になったり味方になったりするだろう。しかし同時に、そんな「力」が働いている時、そこにはまたマネキンたちの祈りもあるのだ。世界に沈黙はないかもしれないが、祈りであふれている。そして、祈りこそが「力」をお膳立てしているのだ。文学とはそのような祈りの前に謙虚になることから起ち上がるのではないか。これは抵抗の拠点になるどころではなく、そんな拠点自体を無効にしまいかねないふるまいである。しかし、そのような事態を真摯に受け止めることから始めても遅くはないだろう。もちろん、何か書けばそれは常にすでに「力」の産物になってしまう。しかし、祈りも常にそこにあり、失われたりはしない。だから、いつもそこから始め直すことができる。何も欠けてはいないのである。祈りの文学は喪の仕事ではない。

注

- 1 たとえば、ショシャナ・フェルマン『声の回帰』31-39頁；ジャック・デリダ『尖筆とエクリチュール』192-216頁など。
- 2 とりわけ、(少なからぬ文学研究者が指摘するところの) 自らを語る言葉を持ちえない人々に語らせる試みとしての文学、たとえば「マイノリティ文学」と研究者が呼んでいるそれなどはこの文脈においてその価値を付与されている。
- 3 沈黙の文学について考えるのに思考の糧となった書を挙げておく；小林秀雄「様々なる意匠」、ロラン・バルト『零度のエクリチュール』、ジョージ・スタイナー『言語と沈黙』、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン『論理哲学論』。以上に加えてショシャナ・フェルマンとドミニク・ラプラの一連の論争には教わる場所が多かった。なお、イーハブ・ハッサンの著作とはその題名以外に共有するものはない。
- 4 ヘンリー・カボット・ロッジはアダムズがハーヴァードの歴史学教授時代の教え子であり、出版当時のマサチューセッツ歴史協会の会長である。
- 5 さらに、1885年に起きた妻、マリアンの突然の自殺は大きなスキャンダルとして当時の世間の注目を集めてしまっていた；“the tragedy was trumpeted to the social and political world of Washington, New York, and Boston, where they and their families were

widely known. All their lives they had lived in terror of clacking tongues. Throughout the years of their marriage they had successfully defended their privacy from the society columnists. . . . One can imagine his humiliation and panic, especially when he saw that there were those in the press who were not above petty revenge” (Samuels 1958, 247).

⁶ ゆえにヘンリーの兄が二人の父チャールズ・フランシス・アダムズの伝記を書いてしまったことを激しく非難していた; “thank my miserable cowardice that I did not write it! . . . I should prefer not to dissipate the atmospheric effects of time and distance, and not to bring our figures too near for perspective. Our father would stand out better, larger and even truer, without definition. I do not like the microscope, or even the telescope as a family ornament. . . . At any rate, I have, at awful cost, learned to hold my tongue except in letters, and am getting nervous even about them. No man that ever lived can talk or write incessantly without wearying or annoying his hearers if they have to take it in a lump” (*Letters V* 100).

⁷ アダムズを書くことや書かれたものへの不信は息子を亡くしたジョン・ヘイ夫人への手紙に端的に顕れている; “For writing, I knew you would be overwhelmed with letters. I knew too that almost anyone would say more than I knew how to do, for I never have learned yet that anything could be said, when silence is all that is left. I was afraid even of doing harm; for the one idea that was uppermost in my mind was that when I was suddenly struck, sixteen years ago, I never did get up again, and never to this moment recovered the energy or interest to return into active life. The object of all others is now to prevent John or you from breaking down in that way, and to save what is left, at least until nature has had a chance to react. My object in writing now is not so much to express sympathy or feeling or interest, — which you know me well enough to need no expression of, — but to find out if possible, in due time, whether you will want my help, or will care to make me useful” (*Letters V* 266). この時アダムズの念頭にあるのは、父の死の直後に自殺した自分の妻、マリアンのことである。

⁸ 対照的に「女から生まれた者がどうして義しくあり得よう」(15-14)とヨブの罪を糾弾する友人たちは、冒頭で述べたような状況を上空から眺め沈黙を禁じる者の位置にいる。

⁹ 「あらゆるマークの構造にもともと属しているところの、抜き取りならびに引用的接ぎ木の可能性……が、記号的一言語的伝達のあらゆる地平に先立ったところでさえ、またその外でさえ、全てのマークをエクリチュールたらしめるのである。エクリチュールたらしめるとは、つまり、おのれの『本源的』意義作用から、そしてまた飽和可能かつ束縛的な一コンテキストへのおのれの所属から、ある点で切断された機能営為の可能性たらしめるということである。言語的であるにせよないにせよ、話されたにせよ書かれたにせよ（この対立の通常の意味で）、単位限が小さいにせよ大きいにせよ、全ての記号は引用されうるし、引用符でくくられうる。」（「署名」27, 適宜訳語を変更した）

¹⁰ これはアダムズの喪の仕事も「未完成」であるということである。そして、このつねに「未完成」な喪の仕事とはメランコリーである。喪の仕事とメランコリーはともに対象喪失への反応であるが、喪の仕事とは対照的にメランコリーは遺された者が対象について「何を失ったか」をはっきりと意識において把握できない時に起こる。つまり、何か失われたものが無意

識の中にあるということであり（フロイト 139）、失った対象を言語によって「支配」することを「否認」しくものゝに固執し続けることである（クリステヴァ 250）。しかし、アダムズの困難を見ても分かるとおおり、「喪の仕事」は果たして本当に可能なのかという疑念を持たざるを得ない。言語には常にすでに差延が先行しているというデリダの洞察を真摯に受け止めるならば、言語によって失われた対象を完全に支配するという喪の仕事が完了することは論理的に絶対にあり得ないはずである。マーティン・ジェイは喪の仕事それ自体を「一つのユートピア神話」とした上で、失われた対象にこだわって喪の作業を続けることを、常に終わりを期待しているという意味で「黙示録的想像力」と呼び、ポストモダンの時代、すなわち（それを期待しつつも）決定的なカタストロフィ（＝「最後の言葉」）は決して訪れない時代にはむしろ、喪の仕事の完了不可能性としてのメランコリーこそがその気質を正確に表していることを指摘している(134-52)。

11 たとえば、Lears 268-69, Kaledin 6, 243-44, Jay 216 など。

12 もちろん、小林秀雄にとってこの「衣装」は「意匠」である。

13 メルヴィン・リオンもまたアダムズによる「力」の概念が「一元論的」であることを指摘している(232)。

14 この「杖」と「脚」の比較はオイディプス神話への言及である。つまり、「一つの声を有しながら、四足、二足、三足となるものは何か」というスフィンクスがかける謎のことである（アポロドーロス III. v. 8）。つまり、アダムズは自らの探求には若さよりも老いの方が役に立つと知っている。ここでいわれている老人としてのアダムズは「弱々しく」「力」に身を任せるだけであるが、その方がいいのである。老いたアダムズはより「マネキン」らしいからだ。

15 このヨブの友人のような糾弾に対して、伝統的に試みられる反駁のフォーマットを二つ挙げておく。1) テクストを「パスティーシュ」や「コラージュ」と呼ぶことにより、決まり文句だけでも、その組み合わせの中にイデオロギーの布置を揺るがす契機があると考える（これは他でもないロウ自身がかつて行っていた（1976 121-22））。2) テクストをマスター・ナラティブに対抗するカウンター・ナラティブと見なす。

しかし、より高度に位置する上空からの視線にさらされると、両者ともに自他（＝敵味方）の境界が曖昧になり、共犯関係を暴かれてしまう可能性が常にある。両者ともに敵味方思考の圏内なのである。

16 このくゝの使い方は永井均に負っている(178)。

17 ラカン派精神分析においても自分自身との出会いとしての〈現実界〉との出会いは死と結びつけられている(ジジェク 48)。

18 ヘシカスムの祈りについては棚次正和『宗教の根源』第4章を参照した。

19 もちろん、デリダであれば差延の運動を通じて不可能な外部の他者という「約束」を待望すると言うであろうが、マーティン・ジェイも指摘するように、そのような最終的なカタストロフィを待ち続けること自体やはりメランコリックなのであり、祈りという単純な事実を取り逃がしてしまう。

引用文献

Adams, Henry. *The Education of Henry Adams*. 1918. Ed. Ernest Samuels. Boston: Houghton Mifflin, 1974.

- . *The Letters of Henry Adams*. 6 vols. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 1982-88.
- Bové, Paul A. "Giving Thought to America: Intellect and *The Education of Henry Adams*." *Critical Inquiry* 23 (1996): 80-108.
- Jay, Gregory. *America the Scrivener: Deconstruction and the Subject of Literary History*. Ithaca: Cornell UP, 1990.
- Kaledin, Eugenia. *The Education of Mrs. Henry Adams*. Amherst: U of Massachusetts P, 1981.
- Lears, T. J. Jackson. *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture 1880-1920*. New York: Pantheon Books, 1981.
- Lyon, Melvin. *Symbol and Idea in Henry Adams*. Lincoln: U of Nebraska P, 1970.
- Porter, Carolyn. *Seeing and Being: the Plight of the Participant Observer in Emerson, James, Adams, and Faulkner*. Middletown: Wesleyan UP, 1981.
- Rowe, John Carlos. *Henry Adams and Henry James: The Emergence of a Modern Consciousness*. Ithaca: Cornell UP, 1976.
- . *Literary Culture and U.S. Imperialism: From the Revolution to World War II*. Oxford: Oxford UP, 2000.
- Samuels, Ernest. *Henry Adams: The Middle Years*. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 1958.
- . *Henry Adams: The Major Phase*. Cambridge: Belknap Press of Harvard UP, 1964.
- アポロドーロス『ギリシア神話』高津春繁訳、岩波書店、1953年。
- ハンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、筑摩書房、1994年。
- フランク・カーモード『終わりの意識』岡本靖正訳、国文社、1991年。
- トマス・カーライル『衣装哲学』石田憲次訳、岩波書店、1946年。
- ジュリア・クリステヴァ『黒い太陽』西川直子訳、せりか書房、1994年。
- マーティン・ジェイ『力の場』今井道夫他訳、法政大学出版局、1996年。
- スラヴォイ・ジジエク『汝の症候を楽しめ』鈴木晶訳、筑摩書房、2001年。
- 棚次正和『宗教の根源』世界思想社、1998年。
- ジャック・デリダ『尖筆とエクリチュール』白井健三郎訳、朝日出版社、1979年。
- . 「署名 出来事 コンテクスト」高橋允明訳、『現代思想』1988年5月臨時増刊号。
- 永井均『〈魂〉に対する態度』勁草書房、1991年。
- シヨシャナ・フェルマン『声の回帰』上野成利他訳、太田出版、1995年。
- ジグムント・フロイト「悲哀とメランコリー」井村恒郎訳、『フロイト著作集6』人文書院、1970年。
- 『ヨブ記』関根正雄訳、岩波書店、1971年。